

## 鹿島槍吊尾根



鹿島槍岳

五龍岳より-

私は夢を見ていた。

猛吹雪の中、シユラフにもぐり込んだままテントの外に放り出され、上向きに寝ころんだままの顔に、雪が降りかかってくる。

冷たい。

早くここから脱出しないと凍死するぞ、と思ったところで目が覚めた。

真っ暗だ。頭が痛い。顔に冷たいものが降りかかってくる。

雪か？ いやそんな筈はない。

一体どうなっているんだ。

手探りでヘッドランプのスイッチを入れ、時計を見る。

八時だ。

八時？

昨夜寝たのは九時だぞ。訳がわからぬ。

それにどうしてこんなに暗いんだ？

ぼんやりしていた頭がこの時はつきりと目覚め、気がついた。

テントが雪に埋まっているんだ！

フレームは内側にねじ曲がり、内張りの布が顔に覆いかぶさっている。

真っ暗の中で、風の音が遠くにあるように聞こえる。

「おい、起きろ、岸本起きろ、萩原起きろ、テントが雪に埋まったぞ！」

もぞもぞと起きだした岸本と萩原だが、事態を察知した後の行動は早かった。

ものも言わずにピッケルを振るって、テントの入口とベンチレーターを交互に必死で突き崩し、苦闘数十分、遂に穴があいて、そこから雪もろとも冷たい風がどつと吹き込んで来た。

にごった空気が一気に吹き払われ、私達は大きく息を吸い込んだ。

昭和三十四年三月、鹿島槍吊尾根。

猛烈な吹雪の中に孤立した、ウインパー型テントでの朝であった。

テントは私たちの他にもう一張りあった。

川崎重工神戸の課長をして居られたリーダーの大樫さんと、野上兄弟、香地の四人がいた。

ほんの数メートルしか離れていない処に張られているこの隣のテントが、想像を絶する吹雪の為に殆ど見えない。

岸本がやおら完全装備をして出て行ったが、暫くして全身真白になって戻って来た。  
「うん、大丈夫。みんな生きていた」  
と、笑いながら言った。

この時は青春の真つただ中、二十一才。  
パートナーの岸本二十二才。神戸の小さな鉄鋼所を親父さんと二人で経営していた。  
後に、神戸山岳会の会長となる。

萩原二十五才。三菱重工神戸造船所の旋盤工。当時既に、第一級のアルピニストであった。  
神戸山岳会の春山合宿。第十三信、木曾御嶽冬山合宿から二カ月後、鹿島槍から五龍岳へ  
の縦走を試みた時のことである。

鹿島槍岳、二八九〇米。

飛騨山脈、日本北アルプスは黒部峡谷を間に、西には剣、立山連峰、東には白馬から五龍、  
鹿島、針の木、野口五郎へと連なる後立山連峰がある。この連峰は三俣蓮華で一つになり、  
更に南下して槍、穂高連峰となる。

鹿島槍はこの後立山連峰のほぼ中央にあつて、美しい双耳峰を持っている。

双耳峰とは頂上が二つあり、その二つの頂上を美しい吊尾根が結んでいるもので、鹿島槍  
はまさにその白眉である。

特に北に位置する五龍岳からの眺めは、鹿島槍北壁を正面に、北峰と南峰、そして、この  
二つのピークを結ぶ吊尾根とが三位一体を為し、あくまでも堂々と、そして限りなく美しい。  
その美しさと同時に、北壁や荒沢奥壁の積雪期の厳しさが、当時のアルピニストの心を、  
いやがうえにも魅き付けていた。

私たちは厳冬期の木曾御嶽合宿の後、直ちに次の目標をこの鹿島槍に定めていたのである。  
私たちが鹿島槍に憧れていたのにはもう一つ訳があつた。

日本百名山の著者として名高い深田久弥氏が、中部日本新聞社発行の山岳雑誌「岳人」に  
「ヒマラヤ登攀史・八千メートルの山々」、次いで「七千メートルの山々」を連載していたが、  
その中にナンダ・デヴィ（七八一六米ノ祝福された女神の意）があつた。

ナンダ・デヴィは、主峰七八一六米と東峰七四三四米の双耳峰を持ち、そしてこの二つの  
ピークを結ぶ吊尾根が美しく、深田久弥氏はナンダ・デヴィこそヒマラヤの中で名山と呼ぶ  
にふさわしい山であると評している。

このナンダ・デヴィのスケッチ図と、五龍から見た鹿島槍とがとても良く似ているである。  
又、更に、ナンダ・デヴィに魅せられ、その吊尾根をトレースするという大胆な計画に  
挑戦し、若い命を絶つたフランスの登山家、ロジェ・デュブラが書き残した詩があつた。  
その詩、「もしか或る日」が若い情熱に溢れていた私たちの心を捉えていたのである。

もしか或る日

ロジェ・デュプラ

もしか或る日、おれが山で死んだら  
古い山友達のお前にだ  
この書置を残すのは

おふくろに会いに行ってくれ  
そして言ってくれ おれはしあわせに死んだと  
おれはお母さんのそばにいたからちつとも苦しみはしなかったと

親父に言ってくれ、おれは男だったと  
弟に言ってくれ、さあ、お前に次を譲るぞと

女房に言ってくれ、おれがいなくても生きていくように  
お前がいなかった時もおれが生きていたようにと

息子たちへの伝言は、お前たちはエタンソンの岩場で  
おれの爪の跡を見つけるだろうと  
そしておれの友、お前にはこうだー

おれのピッケルを取りあげてくれ  
そいつが恥辱で死ぬようなことをおれは望まぬ

どこか美しいフェースへ持って行って  
そしてそいつのためだけの小さなケルンを作って、  
その上に差しこんでくれ

人の大勢通るところから離れて、そいつを立ててくれ  
氷河の上に輝く暁の光を  
尾根のうしろの真赤な夕陽を  
そいつが映せるように

そしてお前には、ここにおれの贈り物がある  
おれのハンマーを取ってくれ、そして花崗岩にピトンを打ちこむ音が  
身震いするような喜びでおれの遺体を揺すぶるように  
壁や尾根でうんと響きを立ててくれ  
さあ行け、おれはお前と一緒にいるだろう



ヒマラヤの高峰 深田久弥著より

ロジェ・デュブラはこの詩の通りになった。

一九五一年の六月、ロジェ・デュブラはナンダ・デヴィ吊尾根のトレースに挑戦し、遂に帰って来なかったのである。

後に井上靖が書いた山岳小説「氷壁」にもこの詩が取り上げられ、一層有名になった。

この小説に登場する主人公二人のうち一人は、奥又白、前穂東壁でナイロンザイル切断という事故で墜落死、もう一人は滝谷で落石事故に遭遇、命を落とすが、この青年達が愛していたのがこの「もしか或る日」であった。

更に昭和四十年頃になって、この詩に曲が付けられ、山仲間たちに歌われる様にもなったのである。

斯くして私たちは、鹿島槍に魅せられていった。

そしてその吊尾根に閉じ込められたのである。

一步の前進も半歩の後退も出来ない、ただ只管、耐えるだけの日々が始まった。



昭和三十二年初版  
「氷壁」ハードカバー

この吊尾根に来るまでは順調だった。

初日、信濃大町から鹿島の麓の部落、源汲に入り、村の長、鹿野さんに御挨拶をして出発、大沢西侯出会いに至り、ここで青く澄み切った水の流れと別れ、赤岩尾根に取り付いた。膝を没するラッセルを繰り返して、夕方この尾根の森林限界、高千穂平でテントを張った。

翌朝は実に素晴らしい夜明けであった。一面殆ど水色に近い白銀の世界である。

その中に私たちのテントだけがオレンジ色に浮かび上がっている。

眼前には白衣を纏った鹿島槍、南峰と北峰、二つのピークを結ぶ吊尾根と東尾根がある。毅然として、そして端整なたたずまいである。

やがて朝陽が白銀の世界を真赤に燃え立たせていき、それが次第に薄れていって水色に、そして又、白銀の世界に変わる。とてもこの世のものとは思えぬ美しさである。

大いに気を良くして頂上を目指しラッセルを開始したが、メンバーの一人、香地が体調の不良を訴えた。已むを得ずその荷物を全員で分担し、本人はカラ身で歩かせたが、ペースはぐつと落ちる。

南峰頂上は、正午を過ぎて二時頃となる。ここから吊尾根への降りには、黒部の谷へ一気に切れ落ちていてスリップすれば命は無い。ザイルをフィックスし一人一人ステップカットをしつつ降ったが、それでも最後のところで萩原がスリップした。岸本が確保して、事無きを得たが、ここ迄で時間切れ、北峰との間を廻り込んで更に降り、八峰キレットまでの予定であったが断念し、この吊尾根にテントを張ったのである。

この夜は快晴、満天の星空だった。

身を切るような冷たい空気の中で空を見上げると、濃い水色の空に星がいっぱい輝いている。周りは峨峨たる山容でこれが薄く白々と浮き上がり、そしてテントの東は信州側へ、西は黒部側へすっぱりと切れ落ち、如何にも、雪と岩の世界、その空間に我あり、といった趣であった。

この日の夕食は大奮発をして、すき焼きにした。山行最後の日の分を繰り上げたのである。これが大失敗であった。

先ず凍った雪を鋸で切り取り、このブロックをコツフェルに入れて、ラジウスで溶かして水を作る。この水を作るのに大変な時間がかかるのである。又、すき焼きと言っても実は、名ばかりのもので、野菜は全て手作りの乾燥野菜、肉はガチガチに凍っていて完全に煮えるのを待っている訳にはいかない。米も同様、気圧のせいもあって半煮えである。

それでも、鹿島の吊尾根でのすき焼きだ、という訳で私たちは大満足であった。大失敗だったというのは、この夜があまりにも見事な快晴であり、まさかその夜から山が荒れ始め、数日に亘りここに閉じ込められるなどということは全く想像せず、良い気になつて、すき焼きなどして油断していたことである。

夕食後萩原が、食べ残した福神漬の袋を手持って

「おい、もういらぬいな、捨てるぞ、良いな」と、念を押した上で、テントの入口を開け、信州側へ向かつて放り投げた。

今ならこの行為は禁止である。ごみは全て持ち帰れということになっている。

然し、特に冬山の場合は、テントの中を清潔にする努力、工夫が必要で、その意味からは、この福神漬を捨てるのは正解なのである。

さて翌朝、私は雪が顔に降りかかる夢で目が覚めたのだが、相変わらず顔に冷たいものが降りかかってくる。

ふと気が付くと、頭にかぶっている目出帽もシュラフもべっしゅりと濡れているのである。テントの中で、どうして雪が降るのだ？

仔細に点検してやっとその原因が分かった。テントの内張りに水蒸気が凍りつき、この氷が強風でバタバタと煽られるたびに、雪のようになって落ちてくるのである。寝袋は勿論、テントの中はすっかり濡れており、更に始末が悪いのは、これが又凍るのである。シュラフはもぐり込む時にバリバリと音がする。

「まるで氷の中で寝ているようだな」と、岸本が言ったが、全く笑い事ではない。

昨夜、食事の後、テントの中の空気を入れ替えなかった為に、中にこもった水蒸気が凍り付き、この後ずっとこの水蒸気と氷に私達は悩まされ続けたのである。大失敗である。

それにしても猛烈な吹雪である。テントは強風に煽られてバタバタと揺れ、内側に張ったフレームがねじ曲げられる。

雪はどんどん吹き付けて来て、一時間毎に交替で外へ出て除雪しないと、あつという間にテントが雪に埋まってしまふのである。

視界は全くきかない。ほんの数メートル離れると何も見えない。

除雪作業で外へ出る時は完全装備をして中からザイルで確保した上でないと何が起こるかわからぬ。うっかり方向を間違えると自分のテントを見失う恐れすらある。

風は小石のような雪と一緒に唸り声をあげて襲いかかってくる。

まとも立っていることはおろか、眼をあげていられない。ゴーグルをしてもこれがあつという間に凍り付いて何も見えなくなるのである。

除雪といつても、この雪が始末が悪い。フワフワと軽くてしかも執念深く積もってくる。除雪の効果が全くない。然し放っておくとこの雪に埋まってしまふ。

遂に私たちは観念した。

ベンチレーターだけを開けて、テントが半分位は埋まるまで除雪作業を止めた。これだと三時間くらいの作業で済むことになった。

さてここで、全国天気概況（漁業気象）を感度の悪いトランシーバーラジオで聞くことにする。

「鳥島南南東、風力三、一〇―三ミリバール」に始まる日本列島を取りまく各地の気圧配置、そして温暖前線、寒冷前線が張り出している線とこの移動状況等を約三十分間放送する。

これを基に天気図を作成するのである。そもそもこの天気図作成作業を、前日と前々日の、二日間、あまりの快晴に油断して手抜きをしたのも失敗であった。

これをちゃんとやっていたら、まさか吊尾根にテントを張る、などという馬鹿なことは、やらなかったのだ。

出来上がった天気図を見て、私達は言葉を失った。

「台湾坊主だ！二つもいるぞ！信じられん！」

「これはどうしようもないぞ。下手をすると一週間停滞だな」

台湾坊主というのは冬季末から春の始めに、台湾付近で発生発達する温帯低気圧のことで、いわば中型の台風である。本州南岸沿いに北上し、山は大荒れとなる。

この台湾坊主のせいで、多くの遭難事故が発生している為、登山家たちには随分恐れられているものである。

天気概況はこれが二つも並んで発生し、北上していると伝えているのである。一つで三日荒れるとして、二つ並んで来たら一週間は動けぬということになる。

道理でこの荒れ様は異常だ。台風なのである。

食料と燃料は何日分ある？ いや最低一週間もたせるにはどうするか？を協議した結果、一日二食、お粥とし、副食の煮炊きは中止、そのまま食べられるものだけとする。

除雪は三時間毎、これだと夜も一度除雪当番をしたら次回までは八時間寝ることが出来る。

さてこれで、時間はたっぷりあることになった。気が遠くなるほどである。

やらねばならぬ作業は、一日二、三、四回の除雪作業とテントの張り綱のゆるみの補正だけ、後は一日二回、お粥を食べて寝転んでいるだけのことである。

天気概況を聞いて天気図を作る作業も、一日二回程度、他にやることは全く無い。

このような状況になった時、荒れ狂う吹雪の中、人は精神に異常を来たすことが良くある。

何も見えない上に、夜も昼も絶え間ない唸り声をあげて風雪が襲いかかって来るのである。生きて帰れないのではないかと、思い始めたりするのである。

現に、この吊尾根で停滞中のニュースで聞いたのだが、私達が居た鹿島槍の北方、五龍岳へのルート、遠見尾根でテントを張っていたパーティーの一人が精神異常を来たし、仲間が制止するのを振り切って、着ているものを全部脱いで裸になり、テントを飛び出して、行方不明になったとのこと。

私達が居る吊尾根からではとても無理だが、遠見尾根からであれば、なんとか降れるかも知れない。必死に仲間が救援を求めて降ったのであろう。

このような状況になった時、大切なのは仲間に対する信頼である。

この点、私達は大いに恵まれていた。相互信頼は絶対だったのである。

時間はイヤというほどある。しかも下手をすると一週間の停滞である。

萩原が提案してきた。

- 一 みんな知っている歌を出し合って、それを覚えて全員で歌おう。
- 二 何でも知っていること、学問のことでも、仕事のことでも、歴史でも、文学でも、それを一人ずつ順番に話そう。
- 三 みんなそれぞれの生い立ち、終戦の頃のこと、山を登り始めた頃から神戸山岳会へ入るまでの山歴を全部話そう。
- 四 もし、彼女がいたら、その子のことを話そう。
- 五 聞き度いことは遠慮なく聞こう。

但し、生きて帰った時、このテントの中で話し合ったことは、誰にも喋らぬこと、というものであった。

今となつては、何を話し合つたか殆ど覚えていないが、少なくとも退屈したという記憶は全くない。誰かが話している時に、横から口出しをして、混ぜかえしたりして、とても楽しかったということしか思い出せないのである。

萩原の、造船旋盤工の仕事の内容や、岸本の、鉄を溶かしてボルトやナットを作る話なども面白く、特にそれぞれが山を登り始めた時のことや、第十三信で紹介した、私と萩原との出会いの時のこと、その後の入会の経緯など、話題に事欠く筈もなく、更に歌に至っては、ロマンチストの萩原が、仕事場から不要になつた青写真を持ち出しこれを綴じてノートにし、山の歌は勿論、良い歌を沢山書いて持っていたので、これを三人で首つき合わせて歌った。

実に楽しかつたなあ。

この時に覚えた歌で、

守れ権現、夜明けよ霧よ、

山は命のみそぎ場所

雨よ降れ降れ ざんざとかかれ

肩の着ごぞは伊達じゃない

風よ吹け吹け、笠風吹き飛ばせ

笠は紅緒の荒結び

何を奥山 道こそなけれ

水も流るる 鳥も鳴く

坊がつる賛歌の

人みな花に酔う時も、残雪恋いし山に入り

涙を流す山男 雪解の水に春を知る

など、五十年近くも前のことなのに今も私の好きな歌となっている。

確か三日目の夕方だった。誰だか思い出せないが、良い歌が出来たと言い出した。串本節の替え歌だという。

ここは串本、向かいは大島

仲を取り持つ 巡航船

が見事な歌になった。

ここは鹿島 向かいは剣

仲を取り持つ 黒部峡谷

というものである。



猛吹雪のなかである。

数メートル先も見えないのに剣は勿論、黒部の谷も全く見える筈がないのであるが、その歌を聞いた時、私の胸の中では、剣も黒部もはつきりと見えた気がした。

「素晴らしい、みんなで歌おう」  
と、何度も合唱した。

歌っているうちに、この数日苦しい中を語り合い歌い合ったことなどが胸に迫り、思わず涙ぐんで、ふと見ると他の二人も泣いていて、そして笑い合った。

「ここは鹿島、向かいは剣」と、歌った萩原と私は、歌に導かれるようにこの一ヵ月後、雪の剣岳に挑戦し、本峰頂上にテントを張って、八つ峰六峰フェイスや上半部トレースなどヴァリエーションルートを大いに楽しんだものである。

さて隣のテントのことである。

風雪の中、薄くオレンジ色に浮かんでいるが、如何にも頼りなげに見える。俺達のテントも多分あんな風に見えるんだろうな、と思う。

この隣のテントでは、先ず不調を訴えていた香地が発熱した。風邪である。

これが伝染し始めた。已むを得ずテント間の行き来を遮断した。

こちらの三人だけでも健康体でないと、ここから撤退出来なくなるからである。

結果として隣のテントは、暗く悲惨なものとなった。

先日久し振りに野上と会って、この時の鹿島槍の話になった。

「あの時、そっちのテントから歌声が聞こえてくる。時々ワツハツハという大きな笑い声もする。こんな時に一体何がおかしくて笑うのか？ 羨ましいやら、腹が立つやら、全く情けなかったぜ」と、言っていたが、

あの吹雪の中でこちらの声が聞こえるとは、余程大声で歌い、且つ笑っていたのであろう。

更に忘れられぬ思い出がある。確か二日目のことである。

どうにも空腹であるが、我慢するしかない、と思っていたところ、萩原が突然、

「おい、あの福神漬は惜しいことをしたな」と、言い出した。

すき焼きの夜に萩原が

「もついらいな、捨てるぞ」

と、言って、信州側に捨てたあの福神漬のことである。

「そんなこと今更言っても仕方ないだろう」

「いや、俺は今からあれを探しに行つて来る」と、言い出した。

とんでもないことである。

確かにテントを張った場所から、信州側の谷へ切れ落ちているところ迄は、見たところ十メートル位はある。多分福神漬はその間に埋まっているに違いない。然し、その十メートルの先端部分は雪庇になっている筈である。

雪庇とは、強風が吹き付ける尾根などで、風下へ向かって雪が庇のように張り出して出来るもので、後立山連峰では、黒部から吹き付ける風に沿って信州側へ張り出すのである。

つまり萩原は福神漬をこの雪庇の方向へ投げ捨てたのである。

「雪庇を踏み外したら、全員一巻の終わりだぞ。福神漬なんかどうでも良い。止めとけよ」と、言ったが聞かない。

目出帽をかぶり、ゴーグルを付け、オーバースボン、オーバー手袋、ウィンドヤツケ、オーバースユーズ、それにアイゼン、ピッケル、と、完全装備をした上で、ザイル確保をしろ、と言う。



そして、風雪が吹き荒れる嵐の中へ、テントから五メートル以上は信州側へ踏み出さないという約束で福神漬を探しに出て行った。

数時間でテントが埋まる程の雪嵐である。ちっぽけな福神漬の袋なんか見つかる訳がない。萩原のザイル確保は岸本がやった。何しろ岸本は私と違って、身体が頑健そのものであり、如何にも頼れる男であった。

テントの中のキスリングザツクや重量のあるものは全部集め、それを岸本のビレイピンにした。

萩原が出て行ったのが午前九時頃のこと。昼になっても戻ってこない。

「おい、居るか？」

と、聞くと、岸本はザイルを少し引つ張って手応えを確かめ、

「うん、居るぞ。何だか少しずつ動いている」

と、まるで魚を釣っているようなことを言う。

「あまりザイルを緩めるなよ。萩原が調子に乗って雪庇を踏み外したら、テントもろとも俺達も一緒に一巻の終わりだぞ」

などと言いながら、私たちはとりとめもない会話をしていた。

午後の二時を少し廻った頃だったと思う。漸く萩原が帰って来た。

頭の前から足の先まで、どこもかしこも隙間なく全身真白に凍り付いている。

そしてオーバー手袋の上から何やらぶら下げて大声で叫んだ。

「あつたぞー」

何という男だろう。

当時、萩原は二十五歳の若さである。

然し、この精神力、忍耐力はどうだ！

そして仲間の気持ちを引き立たせるのに全力を傾けているではないか。

四時間も五時間も、どこもかしこも真白の世界の中で、一人風雪と闘い、只管、雪の中へピッケルを突き刺して、小さな袋を探し続けたのである。

こんな男は滅多に居るものではない。

事実これ以後今日迄、私はこれ以上の男に会ったという記憶が無いのである。

この福神漬は最後迄私達の食事の友となった。

この時萩原は、恐るべきことを私たちに報告した。

「テントが沈んでいる」

と、言うのである。

確かテントを張ったときは、隣のテントと同じレベルに合わせたが、今は

「俺たちのテントが下の位置にある」

「岩に結んだ張り綱も、テントから岩へ向かって上方に伸びている」

と、言う。

これは明らかにテントが沈んでいる。下の雪が柔らかい、ということになる。

「俺たちは雪庇の上にいるのか？」

「下は空か？」

「どうする？」

顔を見合わせたが、これはもうどうしようもない。

この雪嵐の中でテントを張り直すことなど不可能である。下手に動くとテントもろとも谷底へ吹き飛ばされることは必定である。

それに今居る場所の他には、テントを張るだけのスペースがこの吊尾根には無い。

一瞬顔色が変わった私たちが、すぐに腹を決めた。

「その時はその時、仕方がないだろう」

「雪庇はこの雪でもっと先へ伸びている。滅多に崩れはせんだろう」

などと手前勝手なことを言い合って、以後二度とこのことは話題にしなかった。

然し、本音では恐かったなあ。

四日目の夜だったと思う。

天気概況では翌日、台湾坊主が日本列島を離れると報じていた。

食事を終え撤収準備をしていたら、隣のテントから大樫さんがやって来た。

すぐ隣に居るのに随分久し振りである。

「イヤー、全員風邪だ。明日はお前達が頼りだ」

と、ここ迄は良いのだが、更に

「俺は、お前達全員が倒れても一人で帰ってみせるぞ」

と、ニヤニヤ笑いながら言う。

明日の撤収は降って来た南峰の黒部側急斜面を登り返さねばならぬが、この連日の風雪でガチガチに凍っているであろう。

然も、半端な斜面ではない。スリップすれば黒部へ一直線、命は無い。

我々の体力も極端に落ちている。相当な技術と精神力が要求されるに違いない。

大樫さんは、私の神戸山岳会入会を支持してくれた人であり、素晴らしい笑顔の持ち主で、

心から山を愛し、若い会員たちの人望を一身に集めていた。

大樫さんの気持ちはしっかりと私たちに伝わって来た。

性根を据えて頑張ろうな、ということなのである。

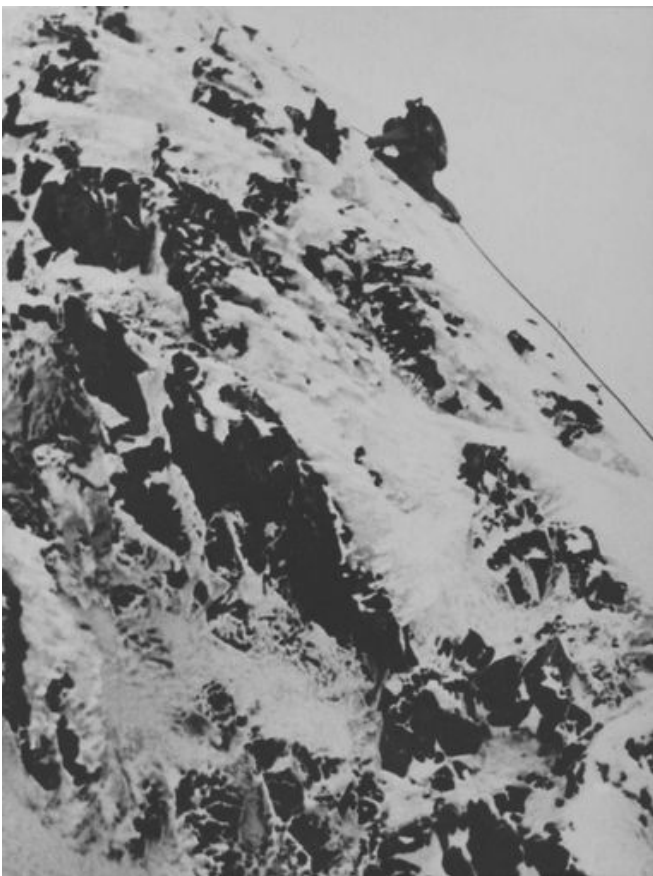
私たちも笑いながら

「大樫さん、偉そうなことを言うけど、俺達が居なかったら大樫さん一人ではあの斜面は登れないでしょう?」

と、言うのと、大樫さんは呵呵大笑、

「いや、全くその通り、頼むぜ」

と、言っつて、相変わらざるの猛吹雪の中を帰って行った。



筆者、南峰頂上へ

翌朝は四時起床。

軽く食事を済ませて撤収準備に取りかかる。

六時三十分頃、薄明かりの中でテントをたたみ始めた時、風向きが急に変わり、谷底から山の頂きへ向かって、風が激しく雲もるとも吹き上げて来た。

「晴れるぞ!」

と声をかけ合っているうちに、黒部から吹き上げて来る風は益々激しくなり、突如周囲の雲は切れ始め、青空が現れた。

抜けるように綺麗な青空だった。

私は遂に今日に至るまでこれ以上の青空を見たことが無い。

遠くに黒部を挟んで剣岳が見える。真白である。

わずかにチンネの岩壁が、三の窓の上に黒く見えるだけである。

そして眼前には、鹿島南峰の登り斜面が雪の鎧を纏ってその姿を現した。

黒々とした岩と、そしてその周囲は、ガツチリと氷が覆っている。

斜度は? 殆ど見上げるばかりの斜面である。こんな処を俺達は本当に降りて来たのか?

先ず、登攀技術ではナンバーワンの野上がカラ身でステップを切って登って行き、ザイルをフィックスする。続いて岸本が、ザックを担ぎ野上のフィックスしたザイルに従って、ビレイピン迄登る。更に野上が岸本の確保により上へ登りザイルをフィックスする。

この繰り返しの中で一人一人がフィックスされたザイルと切られたステップに従って登る。南峰頂上へ登り返すのに二時間以上を要した。頂上に立った時は流石にほっとした。



南峰頂上  
後方剣岳  
右より筆者、岸本、野上(弟)

あとは降るだけであるが、東面から吹き付けて来る強い風に押されて、ついすっかりと雪庇を踏み外さないよう、神経を使う。

赤岩尾根の降りの取り付きは、連日の雪で、殆どどこが尾根なのか良く分らない。尾根を間違えると、とんでもないことになる。幸い晴天に恵まれ南峰頂上からこの尾根を見定めていたので、ここに近づいた時、どうやら降り取り付き点を発見できた。

但し、登りの時とは様相が一変しており、一歩一歩慎重にステップを切らないとスリップしそうである。もしスリップしたら絶対に助からないであろう。

緊張の連続であつたが、実に快適でもあつた。

何と言つてもあの苦しいテント生活から解放され、今や快晴のもと、鹿島槍の双耳峰と、その北峰から信州側へ伸びる東尾根を眺めながら、新雪を蹴散らして降るのである。

雪山登山の醍醐味ここに極まれりである。

ただ、隣のテントに居た香地は熱を出していた。

荷物は全員で分担したがそれでもよるとして、うっかりするとスリップ転落しそうになる。

サポートしつつ降るので、時間がかかる。

尾根を降りきつて、大冷沢出合へ出た時はすっかり日が暮れていた。

手の切れそうな大冷沢の雪解け水をすくって飲んだ。

美味かつたなあ。

残った食料、といつても最早何だか訳の分らぬ代物であつたが、これを口へ詰め込み、ヘッドランプを頼りに歩き始めた。

源汲の狩野さん宅へ辿り着いたのは夜九時頃にもなっていただろうか。暗闇の中で、狩野さん宅の灯りが見えた時は嬉しかった。

ここで初めて助かったと言う思いがこみ上げて来た。

狩野さんは私たちを囲炉裏のそばに案内してくれた。

囲炉裏では、豪勢に薪が燃えていた。

奥さんが、大きなお皿に野沢菜の漬物を山盛りにして、お茶と一緒に出してくれた。

全員物も言わずに、それを食べるようにして平らげてしまった。奥さんがおかわりを出してくれたが、それもあつという間に食べてしまった。

多分、疲労の極にあった私たちには、この野沢菜が最適であることを、狩野家の人たちは知っていたのだと思う。

イヤー、あの野沢菜は美味かったなあ。

このようにして昭和三十四年春の鹿島槍は終わった。



この翌年私たちは、果たせなかった五龍岳 鹿島の縦走を遠見尾根から登り、五龍岳から八峰キレットへ至り、鹿島槍北峰を廻りこみながら南峰を登り、同じく、赤岩尾根を降った。

八峰キレットで吹雪かれて停滞したが、全行程五日でこの縦走は果たした。

然し私たちにとっては、縦走を成功させた時よりも昭和三十四年の吊尾根から敗退した時の鹿島槍が、強烈な思い出となっているのである。

特に風雪の中、テントで歌った歌の数々は、スッパリと切れ落ちた吊尾根とともに、今も生き生きとして胸のうちにある。

この時のメンバーのうち大樫さん、岸本、香地は既にこの世を去った。

萩原は会を去り、その後脳梗塞を患って、不自由な身体になっていくと聞く。

野上一人が元気である。たまに会うと必ずこの鹿島槍のことが話題になる。

そして今はこの世にいない山仲間のことか今も生きているかのように、鮮やかに、そしてしみじみと思い出されるのである。

平成十七年九月九日

重陽の節句に

船橋 巨

## 用語解説

ウィンパー型テント

マッターホルン初登攀のウィンパーが考案したところからこの名がある。両端に合掌型の支柱を用い、グランドシートは縫いつけてある。屋根型で断面は正三角形。立ち上り部分は無い。積雪期の尾根、稜線などで使用する。風雪には強いが、居住性は悪い。

フレーム

テントの内側から外へ向かって布を張り出す為の骨組み。カーボン素材のようなもので弾力性があった。

ベンチレーター

テントの入口部分とその反対側の上部にある通気口。

内張り

寒気を防ぐ為、テントの内側にもう一枚張る布。当時はこれが絹の布であった。矢張り湿気に弱い。

コックフェル

アルマイトなどで作った登山用調理具の組み合わせセット。

ラジウス

携帯用のガソリンコンロ。元来はスウェーデン製の携帯用ストーブの商品名。

シュラフ

スリーピングバッグ。寝袋。二重封筒型になっていて、頭、顔から全身を覆う。素材は防水加工した布のカバー。二重封筒の中には水鳥の羽毛が詰められていた。湿気を吸うと重くなる上に、保温、通気効果が悪くなるので、この対策には苦労した。現在は、化学繊維が発達し、軽くて保温、通気性ともに極めて優れたものとなっている。

目出帽

わずかに目だけが出せる頭から首筋までかぶる純毛の帽子。

オーバーズボン、オーバーシューズ、ウィンドヤッケ、オーバー手袋

全て、防風、防雪の為のもの。当時はこれらは全て防水加工した布製であったので、凍ることが多く、着脱には苦労した。今はナイロン製の優秀なものになっている。

## ピッケル

氷雪でステップを切ったり確保するのに使う。滑落した際に、これを使ってブレーキをかける。ヨーロッパアルプスの羊飼いが使っていた杖が原形。アルピニストの魂である、と言われている。

## アイゼン

氷雪上を行くとき、スリップしないように、靴、又はオーバーシューズの上からつける鉄の爪。一般的には八本爪。アイゼンバンドが麻布製であった為これが凍って着脱には苦労した。現在は軽合金で出来ていて軽く、着脱も簡単なものになっている。

## キスリング

部厚い布で作った横幅の大きいザック。現在では全く見かけなくなった。

## ハンマー

ピトン、ハーケンを岩の裂け目に打ち込む鉄槌。

## ピトン

ハーケン。岩場での確保などに使う登攀補助道具。鉄釘。根元に直径一センチ位の穴があり、先端は薄く尖っている。岩の裂け目（リス）にこれを打ち込み、根元の穴にカラビナをかけて、これにザイルを通し確保点とする。

## カラビナ

楕円形の鉄のリング。手の平くらいの大きさで、バネ仕掛けで一部が円の内側へ開くようになっていて。

岩に打ち込んだハーケンの根元の穴にこれを掛け、更にこのリングにザイルを通して確保点とする。

ハンマー、ハーケン、カラビナ、ザイルが岩壁登攀の基本用具である。

## 雪庇

本文御参照

## フェイス

岩壁の真正面部。

岩壁はいろいろな様相を持っている。稜線部（リッジ）、溝を形成している岩溝（ルンゼ）馬の背の様に明瞭に突出している部（カンテ）などがあるが、全体にこれ等の様相を一つにしつつ、その真正面に雄大で美しい壁を形成しているものをフェイスと呼ぶ。

岩壁登攀ルートのエース格とも言うべきものである。

鹿島槍北壁、白根北岳バットレス（胸壁）穂高滝谷ドーム（塔）前穂東壁、剣岳チンネ（岩塔）、池の谷ドーム、などの正面の壁は美しいフェイスを持っている。

前穂北尾根三峰フェイス、剣岳八つ峰六峰フェイスなど。



### ヴァリエーションルート

単純に頂上へ登るというのではなく、より困難なルートを選んで、例えば頂上へ突き上げている岩壁や急峻な沢などを登る時、それらのルートをヴァリエーションルートと呼ぶ。

### ピレイピン

確保点。

### ラッセル

深雪の中を進む場合、先頭が雪中に道を切り拓いていくこと。  
五分乃至十分で先頭は交替、最後尾につく。この繰り返しでルートを切り拓く。

### フィックス

固定させること。

### トレース

辿る。

誰かのラッセルの跡を辿る場合や、二つの地点を結ぶ線を辿る場合、この他、岩壁の稜線や尾根筋を辿る場合など、これをトレースする、と表現する。

### ケルン

石をピラミッド型に積み上げて作った標識。谷筋から尾根、稜線へ出たポイントなど、展望が開けた場所に立てられることが多い。美しい頂上でもよく見かける。遭難した人のメモリアル墓碑になることもある。登山家達にとって、心のやすらぎの対象でもある。

### 剣岳

立山の北方に位置する。二九九八米。北アルプスの南部の雄が穂高だとすれば、剣岳は北部の雄である。山全体が岩で出来上がっている。岩壁の各ルートの困難さは、穂高の奥又白、滝谷を凌ぐであろう。

### 三の窓

剣岳本峰から北方へ、小窓の頭、池の平へ伸びる稜線にある大きな鞍部。眼前にチンネがある。剣沢から西へこの鞍部に向かって登り、下から見上げると両サイドが切り立った岩稜になっている為、まるで青空に向かって開けられた窓のように見えることから、この名称がつけられた。この窓は三つあって、右から大窓、小窓、そして三の窓となる。

三の窓はチンネと西面池の谷の各ルートへのベースキャンプ地である。  
鹿島槍からはこの剣岳、三の窓、チンネが真正面の位置になる。

チンネ

岩塔の意。

剣岳で最も有名な岩場。殆ど垂直で高距三百米。堂々たる風格と美しいフェイスを持つ岩壁である。三の窓の雪渓に向かって切れ落ちているので素晴らしい高度感がある。ここを登っていると、雪渓を歩いている人の動きが小さなゴマ粒のように見える。

剣岳八つ峰

長次郎の雪渓と三の窓の雪渓を二分する岩稜。剣沢からチンネ、クレオパトラニードルに向かって突き上げている。

六峰フェイス

八つ峰の長次郎側にある有名な岩壁。

奥又白

前穂高岳の東面岩壁群の基点。梓川、新村橋から、前穂高岳方面へ約二時間の行程。奥又白池が有名。

前穂東壁

奥又白随一の岩壁。高距三百米。

滝谷

北穂高、奥穂高、ジャンダルムを結ぶ稜線へ向かって突き上げている飛驒側の最奥部。第一尾根、第二尾根、クラック尾根、ドーム、C沢右俣奥壁など名だたる岩壁の殿堂である。

八峰キレット  
はちみね

鹿島、五龍間の岩稜の最低鞍部。キレットは山稜上の大きな切れ目を意味するが、元来は英語のcleftだといわれている。

昭和三十五年の五龍、鹿島への縦走ではこの八峰キレットを降るのにザイルを使用せざるを得なかった。

